**説教20230416使徒言行録12：1-11「主よ、お救い下さい」**

**イースターおめでとうございます。隠されているキリストの命が、朝毎によみがえり、私たちを永遠の喜びへと導き続けて下さいますように。**

**私たちが今、肉をまとって歩んでいますこの世の中は、大変な苦しみと悲しみに満ちていると言えるでしょう。いくらキリスト者とはいえ、実際いつもいつも喜んで、歩めるわけではありません。しかし、朝毎によみがえって、私たちのうちに住んで下さるイエス様によって私たちは、毎日、新しい信仰・希望・愛に生かされます。今日も又その恵みに感謝してイエス様をほめたたえて参りましょう。**

**今日の聖書箇所は牢の話であります。牢屋の話は、創世記でヨセフが入れられる話から始まって、およそ、次のような筋書きであります。キリスト者がこの世から疎まれ、罪を着せられて、牢屋に入れられるのですが、その牢屋の中でも共にいて下さる主イエスの信仰・希望・愛によって生かされて、そうして牢の中でかえって力を蓄えて、その隔ての壁を打ち破って、力が増し加えられて外へと押し出される、ということであります。**

**今日の聖書箇所では、牢屋に入れられたペトロは、主イエスから遣わされた天使と対話し天使に導かれて、壁を破って解放されました。**

**又、少し先の16章では、牢屋に入れられていたパウロとシラスとが、讃美の歌をうたって、神に祈っていると、突然大地震がおこり、たちまち牢の戸が皆開いて、全ての囚人たちの鎖も外れてしまったので、パウロとシラスとは解放されたのでした。**

**又、最初のほうに戻って、創世記でヨセフが牢屋に入れられた時のことをひもといてみますと、、創世記39章20節以下、**

**ヨセフを捕らえて、王の囚人をつなぐ監獄に入れた。ヨセフはこうして、監獄にいた。しかし、主がヨセフと共におられ、恵みを施し、監守長の目にかなうように導かれたので、**

**監守長は監獄にいる囚人を皆、ヨセフの手にゆだね、獄中の人のすることはすべてヨセフが取りしきるようになった。**

**この３ケ所で、ペトロ、パウロ、シラス、そしてヨセフたちが、牢屋から解放された次第と言うのは、見てきましたように、神の恵み、神の御計画、神の導きによることであります。そして私たち人間から見れば、その業は、あり得ないことであり、奇跡であり、人間の思いをはるかに超える出来事なのです。**

**聖書は、敢えてこの神の御業による、牢屋からの解放ということを、印象深く物語っています。それは人の業による牢屋からの解放ということと対照的に物語られているようです。**

**人の業による牢屋からの解放の物語も、それなりに印象的で感動的であり得るでしょう。例えば、ルパン三世が、仲間たちの助力を得て、牢屋から脱出するシーン、ですとか、現実の世の中では政治犯が、人質を取る等の駆け引きによって、解放されると言ったシーンが想起されるでしょう。**

**しかし、聖書が語る、神の御業による牢屋からの解放と言うのは、そんなふうに人間が人間的な計画によって心を高ぶらせ感動をする出来事なんかとは、比べ物にならない程の、大いなる主なる神の恵みと慈しみとまことなのであります。聖書は、この神の御業による人間の解放ということを、目に見える牢屋の話として物語るために、随所で物語っているのです。**

**今日の説教では、この主の御業による人間の解放ということを味わって参りたいと願います。**

**さて、はっきり言いまして、私たちがこの世の中を肉をまとって歩んでいるその歩みは、多かれ少なかれ、鎖につながれ、牢獄の中を歩まされているという面があるでしょう。なぜかと言いますと、私たちが主イエスとはっきりと顔と顔とを見合わせて対面するその完成の時は、未だ訪れていないからです。ですから、私たちはこうして主イエスの十字架の下に集められ、この世での傷を癒され、慰められ、励まされて、再び、新しいよみがえりの命に生かされるのであります。しかし最後にやって来る完成の時には、もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もないのです。そして私たちがそこに至るために、主イエスが私たちの内にやって来られて、道を備えて下さって、私たちがその道を踏み外すことがないようにといつも導いていて下さるのです。**

**ヘブライ人への手紙/ 02章 14節以下**

**ところで、子らは血と肉を備えているので、イエスもまた同様に、これらのものを備えられました。それは、死をつかさどる者、つまり悪魔を御自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあった者たちを解放なさるためでした。**

**つまり、主イエスはこの世の中に閉じ込められている私たち人間の処に、同じように囚人として入って下さって、そして、牢屋の中で、私たちを日々励まして、力を得させて、死と言う隔ての壁をも打ち砕いて下さる為に、自らのお体を十字架上で引き裂かれたのであります。**

**この世の中と言う牢屋には、目に見える壁がありません。それは幸いな事でもあります。**

**詩編23編より**

**死の陰の谷を行くときも／わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。あなたの鞭、あなたの杖／それがわたしを力づける。**

**どんな暗い所に置かれても、わたしは、主が共にいて下さるので恐れることがありません。隔ての壁など意識することなく、わたしは主の光に導かれて正しい道へと解放されていくことでしょう。**

**一方で、この世の中と言う牢屋に、目に見える壁がないということは、かえって厄介な事でもあります。なぜならば、私たちが、主なる神の恵み、御計画を信じられない時、その目に見えない壁が、私たちの心の悪い働きによって、いたるところに立ちはだかることにならないとも限らないからです。**

**この度、こうして日出教会と別府不老町教会との交換講壇の場が与えられ、二つの教会の交わりが深められる恵みに感謝します。今日の日に備えまして、私は貴教会の創立130周年記念誌をお借りして読ませて頂きました。その中で、早川先生が、「どうか聖霊と言う良い風が教会に吹きますように」と祈っておられるのを拝見して、まことにアーメンと思いました。聖霊と言う良い風に満たされ、私たちは神様に喜ばれる人となり、同時にまわりの人たちとの関係も良くされていきます。それは、この世の目に見えない隔ての壁が一つ一つ取り払われていくということです。それが主なる神の恵みであり、喜ばしい御計画なのです。私たちはどんなに暗い時でも、教会に集まって、この隔ての壁が少しづつでも取り払われていく喜びを味わうことが出来ます。そして、それはただ一か所の教会に留まらず、全世界の諸教会がそうやって隔ての壁を取り払われて、キリストに在って一つとされていくのです。**

**今日与えられた聖書箇所を追ってみて参りましょう。ここに出て来ますヘロデ王と言うのはヘロデ大王の孫にあたる人物です、一部にユダヤ人の血を引いている人物で、ユダヤとローマの間に立って、巧みにユダヤ人たちを支配した人物であります。**

**彼は、先ずヤコブを剣で殺しました。ヤコブはキリスト者で最初の殉教者であるとされています。そしてそのことがユダヤ人に喜ばれるのを見て、更にペトロを捕えて、牢にいれてしまいました。彼は、過ぎ越し祭が明けた後に、ペトロをユダヤ民衆たちの前に引き出して処刑するつもりだったのでした。**

**この「ユダヤ人に喜ばれるのを見て」のくだりから、ヘロデ王が、世の人の心を見抜き、その歓心を買うことに長けているさまが読み取れます。彼は人心収攬とそれを誘導するのに長けた人物であり、人間的な計画によって、ペトロを牢屋にいれ、過ぎ越し祭の後の処刑と言う出来事を演出することによって、ユダヤ民衆の間のキリスト教への反感に火をつけようと画策をしたのでした。**

**私たちは、今日の聖書箇所の登場人物が、ユダヤ人たちに限られていることに留意したいと思います。ヤコブも、ペトロもユダヤ人であります。彼らはユダヤ人でありながらキリスト者としてユダヤ民衆から反感を持たれていました。今日の箇所に異邦人は出て来ません。**

**ところがユダヤ民衆は、最初からヤコブやペトロたちに反感を持っていたわけではなくて、少し前の５章26節を読めば分かりますように、５章26節**

**そこで、守衛長は下役を率いて出て行き、使徒たちを引き立てて来た。しかし、民衆に石を投げつけられるのを恐れて、手荒なことはしなかった。**

**とありますように、ユダヤ民衆は、むしろキリスト者の味方をし、サドカイ派などに対して石を投げつけていたのでした。**

**この様に、民衆の心と言うのは数年もすればがらりと変わってしまうこともあるもので、或る意味あてにはならないものですが、ヘロデ王と言うのはそういう変化を見逃さないで、巧みに利用して、民衆の歓心を買うのが得意な人物なのであります。**

**このようにヘロデ王が権謀術数を繰り広げている時、教会では、キリスト者によって、牢に入れられているペトロのために熱心な祈りがささげられていました。キリスト者にとって、ヤコブが殉教をした、キリストの十字架に従って命を落とした、ということはとりもなおさずヤコブの復活をも意味し、喜びでありました。これは過去形で語るべきでなく、今のキリスト者の私たちにとっても、殉教するということは喜びであることでしょう。しかし、古代教会の記録からみても分かるように、当時のキリスト者は殉教者に対して大いに喜んだのであります。**

**牢に入れられているペトロを覚えて祈る教会の祈りの熱心さを支えていたのは、この喜びではないかと私は思います。**

**この時の教会の祈りは、ペトロを牢屋の外に出して下さい、と言うことに留まらず、牢屋の中にいるペトロに、主よあなたが常に伴って下さり、彼を常に救ってくださいという祈りであったことでしょう。**

**そして、この教会の祈りは主イエスに聞き届けられました。私たちは、ペトロが牢屋にいる時間、そして牢屋から解放されてゆく時間が、常に主に祝福され、主によって遣わされた天使の手によって解放へと向かっていく喜びの様子を読み取ることが出来ます。**

**ペトロは言っています。**

**「それで、ペトロは外に出てついて行ったが、天使のしていることが現実のこととは思われなかった。幻を見ているのだと思った。」**

**果たしてこの世の中に今起きていることは、現実なのか或いは幻なのか、キリスト者であれば時折そんなことも黙想しますけれども、牢屋ということでいえば、果たしてこの時牢屋の中にいたのはペトロなのか、それとも熱心に祈っていたこの教会の人たちなのかと言うような思いにもされます。ペトロは最後に我に返って言いました。**

**「今、初めて本当のことが分かった。主が天使を遣わして、ヘロデの手から、またユダヤ民衆のあらゆるもくろみから、わたしを救い出してくださったのだ。」**

**ここでペトロは何がわかったのでしょうか。それは彼が隔ての壁から出てきて牢から解放された時、現実が幻となり又、幻が現実となって混じり合い、人間の計画がこの世で作り出している数々の目に見えない隔ての壁からも解放されて、最後に死からも解放して下さる、主イエスの喜ばしい御計画をはっきりと知ることが出来たということでしょう。**

**私たちがこうして教会で祈る熱心な祈りは、この世で絡みついて来る隔ての壁を一つ一つ打ち破っていきます。私たちは時には言葉にならないような、うめきのような祈りになるかも知れませんが、倦まずたゆまず、救い主イエス様との対話としての祈りを祈り合って参りましょう。**

**祈り**

**主よ、この教会に良い風をふかせて、私たちをあなたのものとして下さい。私たちの間にある隔ての壁を突き破り、私たちがよい関係の内に最後まで歩むことが出来ますように。**

**もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もないという新しいエルサレムは、私たちにとって幻でありながら、今、ここで実現しつつある現実の様でもあります。どうか、それを成し遂げて下さる神の御計画の確かさを確信しつつ、御名をほめたたえさせてください。**

**聖餐に臨む時、あなたは親しく私たちの内によみがえってくださいます。どうか私たちがこの世のどこにいましても、あなたのご臨在の光と慈しみの内に歩んで行くことが出来ますように。**